

私の博物誌

題字 石川進

第六回 「月のうさぎ」

月から来た兎が昨年の初夏、月へ帰って行った。我が家での逗留は六年と八カ月、かぐや姫が舞い降りたかと思える程、可愛らしい生活ぶりだった。

「メルモ」と名付けたその兎は雌で、娘が水戸で見つけて連れ帰ったのだった。「生まれてまだ一月足らずなので、お売り出来かねます」とのペットセンターの係員の話に、娘は責任は私達が持ちますからと、多少強引に譲り受けて帰ったのだった。

メルモは数ある種の中でも、ホーランドロップイヤーといわれるもので、耳は成獣になるにつれて完全に下垂し、走る姿は、お下げ髪が風になびくようで、いつも温かかった。

少し調べてみると、兎はなかなか奥の深い生きものであることが分かって来て、楽しい家族の一員として六年八カ月、自由自在に生活し、私の古い思い込みとは大分違うものを持っている生き物であることに気が付かされたのだった。

兎はバカだというのは全くの誤解で、私達人間の全く思いもよらぬところを持った、賢い生きものであることに気が付かされたのだ。

掌に乗る程の小さなうちは、小さなケージの中で暮らし、次は広間に作った金網のスペースでの生活、そしてそれを楽に跳び越えるようになり、家の中全部がメルモのものとなって、自由自在な生活だった。

兎の中では中型といってよい体軀は、ズングリと短く、筋肉質でしっかりとして、何よりも賢いのが特徴だった。

中国には狡兎という言葉があり、東南アジアでは智慧の神様とされることも一緒の生活で理解できた。西洋では兎の尻尾は幸福のお守りだという話も、なるほどとうなづけ、幸せな毎日を私達家族に与えてくれたのだ。

シェイデット・トータス（亀の甲羅の色）といわれるこの手の色は、一昔前にテレビのコマーシャルで放映された、相馬あ

ひどい左手首をなめてもらうと痛みは消えた。

昨年六月六日の昼前、かぐや姫の魂は月に帰って行った。沢山の痕跡を思い出し、なきがらは私達夫婦が生活する部屋の前に葬り、「月のうさぎメルモの墓」とした。

朝夕、妻は声をかけるのだという。メルモを迎えた折の詩「月のうさぎ」は残っているが、月に送った後の筆は進まないままだ。

月夜の晩にメルモをしのびながら「月のうさぎ」の次の詩を少しずつ記そうと思う。



書いている人



石川 進

いしかわ・すすむ

一九四二年、いわき市平生生まれ。石川紋店代表。家業のかたわら、幼少から書に親しむ。書の世界で培った点・線・面と墨・紙・水の生理を追求し、石刻による印とのコラボによる抽象、具象の絵画表現を展開。書学書道史学会会員、書法探求顧問

故人を送る厳粛な儀式。祈る心を真心こめて
やすらぎの杜遠野がお手伝い致します。



やすらぎの杜遠野
〒972-0161いわき市遠野町上遠野字赤坂27-1
TEL.0246-89-4777

りい〜どメンバーズ募集

「りい〜どメンバーズ」とは、本誌の定期購読、あるいは年約広告の出稿社などを対象としており、メンバーが市民・読者に伝えたい情報などは随時、記事として「無料掲載」致します。

- 50部(月額15,500円)
- 35部(月額11,500円)
- 25部(月額 8,500円)

「原則として上記の3つの形態がありますが、部数などについては、ご相談に応じます。

■お問い合わせ 月刊りい〜ど (株)いわきジャーナル TEL.0246-29-2424